

## 八 滑稽山城掾

附、チャリ淨瑠璃漫談

嘉永七年、嵯峨御所に召されて、——何か珍らしいものを——といふ御所望にまかせて「妹脊山婦女庭訓」を、おもしろい節をつけて、大序から大詰までを朗讀した。それが大いに御感を蒙つて、竹本山城掾の官名を賜つたのである。（併し後に藝人の名稱に國號を禁ぜられたので、山四郎と改めてゐた）慶長の昔徳川家康の御前で、赤松法印が、太平記の講釋を遣つて大喝采を博し、軍談講釋の最初だと稱されたといふ、その故智を學んだのもあらうか。

「日本第一滑稽物語、竹本山城掾藤原兼房」といふ大看板を出して、赤の袴を着て、赤い見臺を控へ、坊主頭で床へ上つた、或時は被布を着たりしてゐた。

チャリ物が専門だから自作が多い。元治元年に三世長門が死んだ時にも「朝嵐冥途の飛脚」と題して長門の冥途物語といふやうなものを上演して喝采を博した。（北の新地の芝居十月興行）また北國で尾上多見藏を助けた話といふのや、自分が武士に變裝した喜劇物語などもある、奇行の多い人である。一面には又、いつも心に一物があつて大伴黒主といふ樂屋名が残つてゐる。

文化二年に生れて明治十四年十月二十二日、八十二歳で歿する時、卒中で、グウグウと大鼾をかいてそのまゝ死んでしまつたといふ、いかにもチャリ語りの終焉らしい最期だつたといふことだ。

京都の五條坂の産れで、大阪では大寶寺町中の町に住んでゐた。ついでに、淨瑠璃節の分野を占めてゐるチャリ淨瑠璃については、殆ど誰れもが關心を持つてゐないやうだし、また知る人も寥々である、少しく説明を加へて置く。

チャリ淨瑠璃の起源だといふ説によると、元文元年三月四日初日で豊竹座に上演された、並木宗輔作『和田合戦女舞鶴』の四段目の口で、豊竹河内太夫が、鶴ヶ岡別當阿闍梨が手負の眞似して、追手を欺くといふ條がある、そこを極めて滑稽的におもしろく語り活かしたので大好評をとつた。由來——阿闍梨場と呼ぶべきを、阿を略して「シャリ場」やがて「チャリ場」に轉訛したといふのだが……………如何だか。尤も斯うした滑稽な趣向は、やはり大近松の創作畑から蔓が伸びて來たのであることは言ふまでもなからう。

近松の戯曲の中には、近松を崇拜してゐた、作者と道化役者を兼ねた金子吉左衛門をモデルにしたやうな道化役、所謂チャリ役が澤山出てくる。歴史物では文章博士といふ三善清行や、

勇士の大森彦七も時に道化役者に扱はれ、阪田金時、辨慶、朝比奈などの豪傑も、屢喜劇役者として踊らされてゐる。時代物の節事景事にも滑稽な色彩が濃く、雪女五枚羽子板の文作系圖や曾我五郎などの勸進帳や、これに類する可笑味の文章は非常に澤山見受ける。世話物に出る下女とか茶屋の小女郎など、たいがいは滑稽化され、近松の輕妙な獨創の鬼才が、滿場を抱腹絶倒させてゐる。一例を云ふと、冥途飛脚の飛脚屋の下女、新口村の忠三の女房、天網島の紀の國屋の小女など、たいてい一曲に一人は出てくる。

三世長門の腰巾着と云はれた竹本多滿太夫もチャリ語りの上手で（淨瑠璃の作もした人）師匠長門との合作『花雲佐倉曙』の渡し場の滑稽なども随分評判になつたものだが。山城掾のやうなチャリ専門の太夫が出てから、大いにチャリ味が宣傳され、素人の天狗仲間にもチャリ語りの専門家が盛んに出た。明治維新といふ不安なゴツゴツした時代だつたから、却つて滑稽味が要求されたのかも知れない、ともかくも大流行になつてゐた。

心齋橋八幡筋、饅頭屋の主人、竹本布袋軒が明治以前に名があつた。北新地置屋の主人花富、上町の嶋菊、など聞えた人々で、チャリ専門で一流の人には、半眠齋、石工の小清水、松屋町の白鳳、堀江の吉玉齋、幸町のサカイに不龍軒など錚々たるもので、語り物は――膝栗毛――

戀女房稽古屋——持丸長者——川口八景——平假名辻法印——國性爺唐へ宿替——三國關所奴の請狀——等々。

五代目彌太夫が、帶屋の儀兵衛や長吉、引窓の二人侍、白木屋の丈八、お染久松のめし梳、同あいたし小助、楠どんぶりこの落武者などを語ると、他に眞似手のない滑稽味があつたといふが、それどころではない、一面大いにチャリ語りの名人で、彼の新作滑稽淨瑠璃が十三種の多數に上つてゐるくらゐで、彌太夫の世に隠れたる持ち藝の半面を窺ふことが出来る。その自作になる滑稽淨瑠璃は

—— 國事犯兵衛伊勢參宮——日本全勝觀からくり——猫戀風雅妾宅——圓平最期口寄——名人極樂話——西洋盡し嬉野周丹の缺落——璃寛仁左衛門雀右衛門最後譚——實川延三郎冥途の乗込——五代友厚、實川延若冥途嘶——日露戰記九連城の落人——市川猿藏最期物語——冥途開化地獄の代人——川竹名人競——等々。

彌太夫の弟にあたる人に、素人チャリの上手として知られてゐた堀江の「彌々子」がある。その妹のお傳といふのが又女チャリ語りとして異彩を放つたもので、彌太夫作の——猫戀風雅妾宅——の猫争ひが得意で、これを語ると近所の猫が皆集まつて來て鳴いたといふ、世人稱し

て猫傳といふ名物女があつた。

チャリ語りの素人として、古今に絶した名物男を一人紹介する。誰れあらうそれは、安永から文政へかけて狂畫で名高い耳鳥齋、松屋平三郎のことである。酒造家から骨董家になつた此人は、奇矯な畫風で、角力や役者の姿を寫し出してゐるが、先天的にユーモアに富んだ性格だつたと見えて、素人淨瑠璃では松平と號してチャリ専門で評判が高い。「音曲鼻けぬき」の隨筆は彼の著で、畫、文、淨瑠璃の才能が渾然として融和されてゐるから偉い。

耳鳥齋の畫の天才ぶりを評して、古潤和尚、鳥羽僧正から學んだもの、或は平賀源内の歳時滅法戒の序文に書いた通り「虚無」から來たもの、いろいろ理窟がましく説かれてゐるが、狂畫の才があつて、チャリ淨瑠璃を語る彼れが、人形芝居の舞臺に登る諸種の人形の動きや形や表情に直接感化を受けぬ筈はなく、彼の作畫のお手本が、このあたりから生れて出たのではあるまいかと云ふ私の臆説も、まんざら虚無でもないと思ふ。

併し明治時代に入つて、その後期に至るまで、チャリ物が大に流行したといふのも、日本一と自己宣傳した山城掾の影響が少くはなからうと思へる。